

夏季福音特別集会 第4回

伝道（証し）・宣教の使命と実践

2018年8月26日（京都KKRくに荘）

奥田昌道

天の次元と地上の次元 御霊は十字架が根底になければダメ 死んでも死なない永遠の生命を受けとれ 「十字架・聖霊」の貫徹 キリスト道の真髄 苦難経たる生涯ゆえ栄光ゆたけき御座の許人の前でキリストを告白する キリストの福音を伝達する使命 地上と天上を結び合わせる仲人パウロのアナテマ魂 キリストの命懸けの愛に生命をもって応える それぞれがそれぞれらしく神の愛を現す 祈り

●天の次元と地上の次元

パウロは、

「十字架の言は、滅ぶる者には愚かであるけれども、救いにあずかる我々には神の力である。世の知者はどこにおるか。力ある者はどこにおるか。」

と、そのくらいの剣幕であるコリント書で書いているでしょ。アテネでパウロは論戦をぶっつけていって、「知られざる神々に」なんて書いてあるので、それで論戦をやって、すっかり落ち込んだ。アテネの人たちは、パウロの弁舌では全然動かされない。復活のことを言い出したら、

「この小鳥みたいに囀なげっているやつは何だ。また今度聞きくわ」

なんて、さんざん侮辱されて落ち込んでコリントへ行つて、

「御霊みたまの力による証明以外に私は知らん」

と、パウロは裸になって体当たりして告白したのがあのコリント前書2章に出てきます。そこで御霊のことが出てきます。御霊のことは神以外に御存知ない。人間だつて自分のこととは自分の霊以外に知つてない、ということが書いてあるでしょ。

そのパウロに共感して、「我はパウロか」とかいうような感じになる。やはり福音の力と
いうのは、いわゆる生なまの人間をひっくり返して、新しく造り変えて、

「さあ、私はお前を用いるから、伝道に出て行け！」

と。今まで弁舌巧たくみでない人が——自分から出て行くなんて全然しなかった——それが身体中に、伝えざるを得ない、黙つておれないという、そういうものがフツフツと漲みなぎってくる。それが福音なんです。福音というのはグッドニュース、善きおとずれ、善き知らせです。その善き知らせを知らせないでおれようかというわけです。

でも、聞いたこともない人は信ずることができない。聞くためには、語り手がいる。語り手は自分からではない。選ばれて「行つてこい！」と押し出されて、語り出す。それが



今日の、ローマ書10章のところですよ。

最初に歌った召団讃歌A15「羔の血を」が十字架でしょ。これは小池先生の傑作ですよ。傑出して素晴らしい作品です。

「羔の血を 身に浴びて

あがなわれたる白き群

苦難経たる 生涯ゆえ

栄光ゆたけき 御座の許

これは黙示録の情景です。苦しみなくして、福音のことはわからないですよ。苦しみを経たるがゆえに、キリストの苦しみを共にする。パウロが、

「キリストの苦しみの足らざるを補う」

なんて言っています。あれは教会においてキリストの苦しみが充分まだ受けとられていない。それを自分が補うという、私はそんなふうにあそこを理解しています。

「神の幕屋の 張られたる

その天然の 霊泉に

渴きを知らぬ 永遠の

生活たのしむ パラダイス」

霊泉です。この地上の泉だつて素晴らしいけれども、もつと素晴らしいのは霊泉である。

先生は非常に「霊」ということを大事にされました。それは幽霊の霊ではない。神の次元なんです。我々は、地上の次元というのは肉の次元でしょ、現象界でしょ。この現象界にとどまっています、神の次元の天の次元を理解できるはずがない。天の次元、神の次元を理解しようと思つたら、その次元の霊をいただいて、初めてツーカーの間柄になります。それをいただかないで、肉の次元に居りながら、この世の論理で居ながらエゴイストのままでいたら、神さまが何を語られたつて、全然受けつけないんですよ。キリストが生きておられた時に、あれだけ素晴らしい御業をなさつても、一時的にはみな喜んだですよ、でも本ものは出来なかつた。弟子ですらわからなかつた。ペンテコステを通じて初めて彼らが本ものに変貌していった。それが使徒行伝でしょ。

「人新たに生まれずば

という、「新たに」とは「天から、上から」生まれなければということ。肉から生まれるものは肉である。霊から生まれるものは、上から生まれるものは霊である。当然のことですね。神さまの次元を肉の地上の次元で理解しようなんて、それが世の人たちは大体——特に知識人なんかさうですよ——そういうのが多い。でも、地の人が天の人に変えられたら、自分の故里の世界ですからね。ところが、地上の人の肉のまま、生まれながらのエゴイストのまま、「神さまの愛」なんて言われたつてわからない連中に、いくら神の愛を説いたつて、受けつけませんよ、拒絶反応ですよ。それがスーツと入つてくるのは、その人自身



がちやんと受容できるように変わっていないといかん。ところが残念ながら、キリスト教伝道でも、そこがなくて、ただ「御言、御言、御言」と、騒いでやっているようなのがどうも多そうなんです。

●御霊は十字架が根底になければダメ

小池辰雄という、本当にいろんな経験を積んでいかれた先生が、

「御霊は十字架が根底になれば、御霊、御霊と言ったってダメだ」

と言われた。「聖霊派」というのがありまして、ただワーワーと祈っていたら何か霊がくだってきて、「聖霊だ、聖霊だ、聖霊きたれり」とやっている。そんなのではないよ。十字架で我々の全存在が、過去・現在・未来全部一貫して新たにされている。

「旧きは過ぎ去った。見よ、一切は新しくなれり」

という新創造なんです。新しい創造です。本来なら新天新地で初めてそれが起こることなんでしょうけれども、それを先取りして、皆さんが地上にいらっしやるあいだに、

「外なる人は破るれども、内なる人は日毎に新たなり」

と、内なる人は御霊によって新たにされた人なんです。だから、我々は地上でこの身体をいただいて生きているあいだは、本当に矛盾構造です。外なる人はボロボロの、歳をとれば段々衰えていくみじめな存在です。最後は土に還る。けれども、その中に滅びないものが来ている、永遠なるものが来ている。

「その滅びない永遠なものを受けとれ」

というのが福音なんです。しかし、

「いえ、受けとれません」

と。それは生の肉の人間は受けとれないですよ、霊の事態は。だから、キリストは、

「十字架で、お前の肉なるものを全部、私は処理した、片づけた。ゼロになったんだ。

あなたのうちのゴタゴタしたものは全部、十字架でふっ飛んだ。その世界を私は用意したよ」

と。台風一過、もう見事な青空が、太陽が輝いている。全部、一から十まで全部、キリストがやってくださったんです。しかも、

「それは天地創造の前から予定されていた」

と、エペソ書に書いてある。神さまのプログラムが着々と成就していつている。そういう神さまの偉大なる創造の歴史。それを聖書は切り取って、我々に示してくれている。そんなふうにする。特に新約聖書は御霊の溢れる世界を展開しているわけです。だから、御霊の世界は、御霊をいただいてない人がいくら研究したって、そんなもので扉は開けないんです。小池先生は、

「キリストの前に降参するまでは絶対、聖書の扉は開かれません」



とハッキリ言われた。ところが、知識人は降参しない。頭で理解しようと思う。絶対ダメなんです。「幼児の心おきなこ」というのはいさういさうことですよ。己をかなぐり捨てて、

「主さま、あなただけです!」

と言う。福音書に出てくるのはみんな切羽つまった人たちです、もうどうにもならんと。

「うちの娘を助けてくれ! なんとかお願いします」

「いやいや、もう私は今日はいんどいんや、そつとしておいてくれ。食卓のパンを犬にやるのはふさわしくない」

「いえ、犬で結構です。食卓の上の立派なものは、イスラエルのお子さま方に

あげてください。私は食卓から崩れ落ちるパンくずだけで充分です」

と。イエスはそこで本当に心打たれなされた。

「あなたの信仰は見事だ、見上げたものだ。帰れ、願いのようになるように」

と。もうその瞬間にその娘は治っていたというんでしょ。ああいう話は本当に感動をもって私たちは受けとらなかつたらウソですよ。

イエスも時には人間みたいなことになっておられたかもしれない。

「もう勘弁してよな、今日はしんどいんやから、もうええよ」

と。例えば、診療所で「もう今日は終わり」という看板を出したところへ、ツロ・フェニキアの女がやってきて、

「うちの娘はこうなんで、助けて!」

「もうあかん。もうシャットアウトなんや」

と。同じことが、夜中に友だちが遠方からやって来たが、食べさせるパンがないので、

「助けてよな、パンを貸して!」

と求める隣人に対して、

「友なるによりては起きて与えることはしないけれども、求めの切なるにより

必要なものを与える」

という。

「ギリシア人かユダヤ人か、信者かどうか、そんなことではない。熱心に求めてく

るやつにはもうかなわんだ」

と。共通しているではないですか、あのツロ・フェニキアの女の姿と。友だちが来たので「パシクレよ!」とやっているのと、共通性があるでしょ。

幼児というのはこれまた、よく「ウワァァァ!」と街で地べたにひっくり返って泣いている子が居る。ねだっているんですよ、おねだりを聞いてもらわないと絶対に動かないという、それで「ワァァァ」とやっているから、親は根負けする（笑）。皆さん、子育てをしていて、そんなのに出会いませんでしたか。その「ワァァァ」とやっているそういうひたむきさ。それをキリストは顧みてくださっている。ものわりのいい良い子は、あるとこ

ろまではいいいですよ、でもそれで限界なんです。けれども、ダメのカスのようなやつの中に聖霊がくだってきて、その人をひっくり返していく。そうすると、変貌ぶりがハッキリしますよね。もともとの優等生がちよつと良くなるぐらいではわからないわけです、「あいつはもともと良かったんやから」と。まあそれが福音の世界のような気がします。

●死んでも死なない永遠の生命を受けとれ

今日は最終回です。最終回は突然現れるわけではない。ちゃんと着々と準備があつて、第1回集会から積み重ねて、やつとここへ来ているわけです。よく、「ローマは一日にして成らず」と言いますが、突然飛び込んできて最深最高の世界に入る——小池先生はよくそういうことを仰つた、「最高最深の世界に入る」と——それは瞬間的には入るかもしれないけれども、出ていったらまた元のもくあみですわ、そんなのは。私はずっと見てきて、そう思います。

私なんかは本当になかなか、小池先生が言つておられる凄い霊の次元に入れなくて、苦しんできた。でも、知らないまにジワジワと身体の中に浸透して、しみ込んできた。人間にはいろんなタイプがありますから、特定の華やかな「ウワーツ」とやつているのが常にいいかという、そうとは限らない。神の御業、みわざキリストの御業なんです。キリストの祈りです。キリストの祈りが我々をひっくり返してくださいってくださっているんです。

「万よろずのことに時あり」

と言います。なにかさうなんです、結局は全部ゆだねましようということ。我々が思う以上に神さまの側で、キリストの側で、ちゃんと我々一人ひとりのことを御存知である。そして、一番いい時にいいことをしてくださいさる。

「御霊言い難き呻きをもて執り成したもう」

と、ローマ書8章にあります。ああいつた非常に重厚な立体的な構造をしつかり受けとる。単なる平面論理ではなく、本当に立体的にしかも歴史的に積み重ねられてきた。しかも、キリストは天の次元に居られた方でしょ。その世界のことにはキリスト以外にはわからないわけですよ。ところが、そのキリスト以外にわからない天の次元を携えて地に降つてこられた。そして、天の次元を展開された。そこであのドラマが展開しているわけです。でも、そういう次元の差がわからなくて、平面的な角度から、

「なんだ、このキリストの奇蹟は？」

とか、奇蹟そのものに驚いた。また夢をもう一度で、

「パンをくれ〜！」

と。五千人を五つのパンと二匹の魚で養われたから、

「この人を捕まえておけば、もうパンに困らない」

と、どつと押し寄せてきた。ヨハネ伝6章ですね。



「あなた方はパンの奇蹟を見て、パンの奇蹟で来たのか。徴だよ。本当のその奥に隠されている御意を受けとれ」

と、そういうことを仰ったのがヨハネ伝6章ですね。

「私をくらえ、私を飲め」

と、さんざん言われている。

「モーセが与えたのは地上のパンにすぎない。

奇蹟ですよ、あれだって。

けれども、それは地上のものにすぎない。あれを食べたって結局みんな死んだではないか。私は生命のパンである。私を食べる者は永久に死なない。私をくらい私を飲め」

と。そういう激しいことを6章で言っておられる。みな弟子ですら躓いて去って行った。

「お前も去ろうとするのか」

「とんでもないです」

というペテロとの問答があります。ヨハネ伝3章は、

「神はその独子を賜うほどに世を愛し給えり」（ヨハネ3・16）

という、あの素晴らしいところ。それから4章は、サマリヤの女との、

「自分が生命の真清水の湧き出でる泉になる」

というところ。それから今の6章。ヨハネはどの章をとつても素晴らしいことが展開されている。8章の中には「罪の女」の話がちよつと挿入されていますけれども。どの章をとつてもヨハネ伝は素晴らしいですよ。10章は「羊と羊飼いの話が出てくるでしょ。雇いの羊飼いは狼が来たら逃げ出すけれども、

「私は羊のために生命を捨てる。人が奪うのではない。私は自ら捨てるんだ」

と、そういうことも言っておられます。それから、11章はラザロでしょ。

「我は復活なり、生命なり。我を信する者は死すとも生きん。おおよそ生きて我を信する者は永遠に死なざるべし」

と。これは永遠の生命の世界のことですよ。クリスチャンだつてみな死にますよ。お墓に持つて行かれますよ、灰になってね。でも、

「朽ちるものの奥に朽ちない永遠の生命が宿っている。これが私だよ」

と。それをしっかり受けとらないと。ラザロは甦らされたってまた死んだ。奇蹟的に甦らされた。墓の中で四日もいて臭くなっているのを生き返らせて、それだけでも大変なことですよ。大変なことばかりですよ。五つのパンと二匹の魚で五千人以上を養うなんて、これも大変なことですよ。もうその他大変なことはいっぱいなんだけれども、

「それは単なる徴だよ。それ自体を求めてはいかん。その奥に隠されている神の御意を受けとれ」



とキリストは言われる。キリストの生命は無限無量で、何千人、何万人であろうと、わかち与えられていく。溢れるほどだという。ラザロは甦った。人間はみな死ぬ。けれども、

「生きている間に、死んでも死なない永遠の生命を受けとれ。それを与えるために私はやって来たのだから」

と。120歳まで生きたって、どうだと言うこと。

「本当の生命を受けとらないと、意味がないよ」

と。「意味がない」というのは言い過ぎかもしれません。でも、神さまの次元からみたら、「人間がこの地上で生きている間に本当のものを受けとれ」

と。やはり神さまには順序があるんですね。まず肉で生まれて、人間の、いわゆる生物としての誕生をして——普通の生物はそれで終わるんでしょう、でも人間は霊止まる存在です——神の霊が宿って、そして、この肉体が土に還る時には見事に復活のキリストの栄光の姿となって現れてくる。これが私たちの本当の姿なんです。

それは全部、神さまの業、神わざなんです。人間が修行して、そんなことが出来るはずがない。まあ、行者さんというのが、なにか「千日回峰」とか讃えられているけれども、私は全然関心がない。キリストだけです。皆さん、どうですか。千日回峰やって立派な修行をして、皆から誉め讃えられて拜まれますか。私は一切関心ない。キリストだけ。この召団の集会はそれなんです。

●「十字架・聖霊」の貫徹

「十字架・聖霊のキリスト道、その神髄を学びましょう」

というのが今回の特別集会の主題でしょ。

《主題：「十字架・聖霊」の貫徹——キリスト道の神髄——》

と、ご案内に書きました。やはりそれをきちつと辿っていくには、第1回の集会から終わるまで来てほしかった、私は本当のところ。部分参加ではなくて全参加で。それが私の願いです。でも、いろんな条件のもとでそれが叶わない人があります。

「叶わない分を、主よ、補ってください」

と、その祈りを持ってくださればそれでいい。絶対こうでなくちゃいかなんて、そんなものはない。けれども、神・キリストの願いというのは、

「この本ものを受けとってほしい。地上は苦しみの連続であろう。地上に心を奪われたら、やり切れんだろう。それを突破するんだよ。単なる慰めだとか、励ましかだとか、そんなレベルではない。永遠の生命をもって私は天からくだってきた。それを受けとってほしい」

と。イエスは祈っておられたら、そのまま天に昇って行ってしまうお方です。眩くなつて天に昇っていく。そのご自分の栄光を捨てて、本来キリストが受けとるべき永遠の生命を



「ご自分は捨てて、我々にみんな下さった。キリストは十字架で殺されて、地獄にまで突き落とされた。突き落とされて終わりかというところ、地獄で苦しんでいる者たちを救い上げて、栄光の姿で現れて来られたでしょ。あれが復活といわれている事態です。」

「復活なんて、息を吹き返すのではない」

と、小池先生はいつも言っておられた。

「本来の栄光の姿で現れた」

と。福音書なんかでは、

「神がキリストを甦えらせた」

と書いてある。小池先生はそう言わない。

「キリストの中にある聖霊が本当の姿となって現れた。現れるべきものが現れただけだ」

と。こんなことを言う人はいませんよ。でも、私は「さすがに」と思った。本来のものが現れてくる。

「隠されたもので現れないものはない」

とありますね。キリストの中に、あのイエスの中に宿った本来の聖霊の生命、爆発的な生命が十字架を通して忽然と現れてきた。

「これが新しい世界だ。この生命を受けとれ」

と。そして迫っておられる。それをいい加減なボヤボヤした気持ちで受けとれるはずがない。知識人はみな落第です。頭で考えるから。幼児の心というのは、「はいっ」と受けとる。

雨は上から降ってきます。下から出てきません（笑）。温泉は下からですけれども。それは地球の真ん中に火が燃えているから、それが出てくるわけです。でも、普通は太陽も上から光がくる。雨も上から降ってくる。それで大空を見上げる。それが我々の姿です。大空を見上げているということは、なにも空中を見ているのではなくて、

「あつ、神さまのご愛は上から太陽のように降り注がれてくるんだ。善き者にも悪しき者にも陽を昇らせ雨を降らせ給う」

と。あなた方はつい、

「あいつはいいやつだから、こう。あいつはけしからんやつだから、こう」

と、そんなふうに関わり手によって態度がみな変わる。これは当たり前なんです。しょうがないです、我々は。けれども、神さまはそれを突き抜けて、

「善き者にも悪しき者にも陽を昇らせ雨を降らせ給う。汝ら、父の全きまったが如く全かれ」

と言われる。我々はできません。

「敵のために祈れ」

と。我々はできません。でも、キリストはそれを全部やられたんですよ。そしたら、我々



はキリストのお弟子さんとして、

「主よ、あなたのお心をください。私はどだいダメです。私はどこまでいつても、いいやつにはよくしてやりたい、悪いやつは徹底的にやっつけたい。この根性はぬけない。一発殴られたら、二発はやり返したいんですよ、倍返しで」と(笑)。でも、キリストはそれをなさらなかったですよ。

「父よ、彼らをゆるしたまえ。彼らは自分で何をやっているのかわからない駄々っ子なんです。どうぞ、ゆるしてやってください。私に免じて」

と。そんな祈りが私たちにできますかというんだ、本当に。だから私は、「ありがとうございます。主さま、ありがとうございます。あなたを置いて他にどこへ行きましょうか。絶対どこへも行きません。主さま、あなたがすべてです。あなたと一つにしてください。そしたら、地上でどんな生活であろうと、何があろうと、病気であろうと、もうそんなことはどうでもいいです」と言う。はい、陰の音が、

「先生は85歳だから、もう充分生きてから、いいよ。いつでも死ぬるでしょ。我々はまだ青春なんだから……」

なんて(笑)。「まあまあ、すみません」と言いたいけれども、ここにおられる方はみな私と似たりよつたりのご年齢だから大丈夫です。でも、青年か、老年か、そんな相対的なことでゴチャゴチャ言っている世界ではないですよ、キリストの世界は。

私が感動するのは、あのやもめの息子を生き返らせる話。お母さんが独り息子を失ってしまつて悲しんで、その柩が担がれてきた。ルカ伝7章に出ていますね。そしたら柩に、

「待て!」

とストップかけて、

「若者よ、出てこい!」

と声をかけられたら、出てきたでしょ。あんなの、驚きませんか。それから、

「タリタ、クミ!」(少女よ、起きよ!)

と。少女は十二歳だった。起き上がった。

「さあ、ちゃんとご飯を食べさせて、元気にしてあげてください」

と。イエスは生命を与えた。それでも、やはり栄養を与えることは必要だから、それはあなた方がやってあげて。いちばん大事なところは私がやったんだからと。「タリタ、クミ!」の一言ですよ。その前に、イエスがここへおいでになった時に、

「少女は死んだのではない。眠っているだけだ」

と言つたら、みんな「ワハハ」と笑つた。笑うやつは全部退けて、真剣な両親と、ペテロ、ヤコブ、ヨハネの三人だけを連れて、子どもの寝ている所に行かれて、「タリタ、クミ!」と呼んだら、少女はパッと目覚めたという、ああいう記事を本当に、



「主よ、『タリタ、クミ！』と御言をください」
と、そういうふうには、自分なら自分が少女になる。自分の娘さん、お子さん、誰か肉親の者が重い病で絶望的なら、

「主よ、『タリタ、クミ！』を下さい。たとえ地上の命は失われても、その中に死んでも死なないあなたの永遠の生命を今ください」
と、そうやって祈っていたきたいんです。地上の命にこだわったらダメですよ。

「己を救わんと思う者はこれを失い、わがため福音のため己を捨ててかかる者は永遠の生命を受ける」

と、ちゃんと仰っている。

「日々、己を捨ておのが十字架を負いて」

と。決して、いわゆる「この世的に楽しませてあげる」なんてどこにも書いてない。それがさっきの小池先生の讃美歌がそうです。

「苦難経たる 生涯ゆえ
栄光ゆたけき 御座の許」

とあります。これは神さまの法則なんです。

(註) 召団讃歌A15「羔の血を」(1980/10/16作)

1 羔の血を 身に浴びて

あがなわれたる 白き群

苦難経たる 生涯ゆえ

栄光ゆたけき 御座の許

2 神の幕屋の 張られたる

その天然の 霊泉に

渴ぎを知らぬ 永遠の

生活たのしむ パラダイス

3 数えつくせぬ

国民の

星と散らばる 幕屋かな

類は相呼び 集りて

主のエクレシヤここに成る

4 我らも地にて 聖名ゆえに

十字架を負いて 生き貫かん

み霊の光 身に浴びて

主のみ生涯を 身証せん

あの「天理教」というのは、天の理と書くでしょ。天の理、それに委ねていこうという宗教だと思おう。私は、天理教というのはまちがっているとは思わない。中山さんとかいう方に何かお告げがあつて、そこから始まったみたいですから。

でも、我々はキリストというお方をいただいたんですよ。このお方を置いて他にどこへ



行きましようか。いろいろ素晴らしい宗教があるでしょう。でも、

「私は、主さま、あなたです。何となれば、あなたは私を根底から、旧き我をひっくり返して、罪なる私をひっくり返して、エゴなる私をひっくり返して、あなたという素晴らしい同質のものをくださった。新しい生命をくださった」

と。ひと新たに生まれずば、上からうまれなければ、元のまま。でも、「新しく生まれる」とは、「神の次元、天の次元に飛躍する」ということです。これは人にはできません。イエスが十字架で道を開いてくださった。

「我は道なり。我は門なり。そこを通れ」

と。具体的に歩いていく。門は入っていく。奥へ行く。じっと坐っていて、頭の中で考えることではないんです。本来。我々はなにもどこかに門を造って入って行ったり、そんなことはしませんけれども、自分の生活の中でそれを味わいながら進んで行く。もしたら、上からの助けがやって来る。

積み重ねですわ、私にとっては。60年、積み重ねてきました、24歳から。そして現在の私があるわけです。救いは瞬間にいただけるのかもしれないよ。でも、「ローマは一日にして成らず」の通り、本当の神の国は、積み重ねによって、ひと一人ひとりの中に築き上げられていく。だから、

「汝の若き日に創造主を覚えよ」

と書いてある。歳とってからでは遅いんです。歳とって救われるのは素晴らしいですよ。今までのマイナス99がそこで素晴らしい天国の味をいただく。でも、余生が少なければ、人に伝えるのも限定されているでしょ。伝えようと思っても、仲間は見なおらんとしよ、同じ歳のひとは向こうにいつてしまつて。若い人に伝えたくて、

「なんや、あの爺ちゃんの言っていること、婆ちゃんの言っていることは、たわごとか？」

なんてなくらいの話になる。

だから、いただいたら、それを自分の中に閉じ込めないで、どんどん、どんどん分かち与えていく。そしたら、分かち与えてこそ、泉は次から次と溢れてくる。泉が出てきてるのに、それを囲いこんで流さないでおいたら、腐っていく。そういうクリスチャンが世の中にたくさんいるんじゃないかと思う。それでなかったら、もう今は世界中クリスチャンで溢れているはずですよ。ところが、本気でこの御霊の次元の世界を求め、生き、それを貫くというクリスチャンがどれだけ今、いるのか私はわかりません。調べたこともないから。でも、他の人がどうだこうだではない。

「お前はどうかなんだ、お前はどのように生きるんだ？」

と、クリスとは直接、私たちに問いかけていらつしやると、そう私は思っている。

「でかいことを考えなくても、お前自身が本ものになれ。お前自身が本ものになれ



ば、そこから始まっていく」

と。そうでしょ。あなた方一人びとりが本ものになる。いや、成れませんよ、自分では成れない。しかし、キリストが宿れば、

「私を見た者はキリストを見たんですよ。私はもう自分は死んでいる。キリストが私の中で生きていてくださるんですよ」

それがパウロの告白でしょ。

「われ主と共に十字架につけられたり。もはやわれ生くるにあらず。御霊のキリストわがうちにありて生き給うなり」

と。ガラテヤ書2章20節。そういう単純な世界をキリストは下さったのではありませんか。「頭のいい人でないと受けとれない」とか、「何々でなければ受けとれない」とか、そういう条件は一切ない。あるとすれば、小池先生は仰った、

「砕けの心。信仰があるなしではない。魂が砕けるか、砕けないかだ」

と。神の前にですよ。「砕ける」ということは、「口を低くする」ということ。「砕けない」ということは、「私は何ものかです」といつて、自分を立てる世界です。それに対して、自分を否定している。十字架の片一方の盗賊がそうです。

「私はさんざん悪いことをして、すみません。もう十字架は当たり前のことなんです。でも、あなたはちがいます。こんな素晴らしいあなたをそばに居れたということだけでも、私は幸せです。御国にお入りになる時に、ああこんなやつがおつたと覚えてください」

という告白に対してキリストは、

「汝、今日、我と共にパラダイス！」

と言われた。あれは、小池先生はいちばん好きな言葉です。

「自分の墓の墓碑名としてあれを書いてくれ」

と。やはり、小池先生はそういうところをちゃんとキャッチされる。そういうことをただ感動するのではなくて、

「私も同じ生き方をします」

というのが、小池福音を受けとっている皆さんだと思う。なにも私は小池辰雄を讃えているのではない。その方の中に宿った御霊の次元というのは凄いということ。しかも、十字架なんです、ゼロなんです。しかも、自分ではゼロになれない。

「幸福なるかな、霊の貧しき者。天国はその人のものなり」

と。自分はちつとも貧しくなれない。霊貧しくなれない。苦しんだ。そしたら、

「恵福なるかな、汝、わが十字架によりて既に霊貧しくされてある者よ、復活の我、聖霊の我、汝のうちにあり」

と、こう響いてきた。これはイザヤ書と一緒にですね。イザヤ書も、



「贖ったから帰ってこい」

「天よ歌え、地よ叫べ。主は贖い給えり」

という。先に主の贖いが全うされた。だから、「帰って来い」なんです。「帰ってきたら、救ってやるよ」ではない。すべて救いは神さまの一方的な御業みわざです。それを受けとるか、受けとらないか、だけなんです。

●キリスト道の真髄

受けとるには、受けとるべき土壌が必要です。土が耕していないといけません。種播きの譬話があります。いろんな所へ種が落ちた。同じ種です。けれども、たいていはダメになってしまった。途中で、茨いばらが被いかぶさって成長を妨げたとか。家族の問題、生活の問題、自分の病気の問題、いろんなものがある。家族を持っていけば、家族に対して責任がある。

「福音も大事だけれども、家族も大事です」

とか言って、もう神さまの方よりもこっちの地上のいろいろなものに、

「いやあ、責任がありますから」

と。立派な言い訳なんですよ、「責任がありますから」と。社長さんなら、

「従業員のために私は責任がありますから」

「ちがうだよ、社長さん、キリストにすぎりなさい。キリストはあなたの従業員を養ってくださるんだから。お父さん、家族のことが心配でしょう。キリストにすぎりなさい。キリストはあなたの必要なものをすべて御存知なのだから」

と。全部、キリストへ目を向けなければいけないのに、

「私は責任がありますから、私はこうですから」

と言って、「私、私、私」が出てくる。

いや、良心的な人がそうでしょ。私なんか良心的でしたよ、もう。それで背負いきれない荷物を背負って潰つぶれていた。生きてるのが嫌になって、朝目覚めるのが嫌になった。そういう時に福音に出会った。私は自分の大学の先生にも告白した。

「私は次男坊ですけども、長男は自分のことしか考えてない人で、家族のことやなんか何も考えてくれない。すべて私があらゆることを全部背負っていかないといかんです。だから、もうしんどいです」

「なにも君自身が背負うことはないだろう」

と、私の先生は言われたけれども。そのぐらい私は責任感が強かった。だから、潰れるんです。力もない人間が重い荷物を背負ったら潰れるのは決まっています。でも、

「ねばならない、ねばならない、ねばならない」

と。私は責任感の塊で、「ねばならない」人間でやってきた。ところがキリストが、「お前じゃないよ、私に任せなさい」



と言つてくださった。地上にはいろいろな人がいるんです。いろいろな人がいるけれども、みんなその限界を示される。

「^{おのれ}己、己、己と言っている、それが罪だ。神さまは必要なものは全部ご存知だよ」と。だいいち、

「お前たちを造り上げたのは私でないか。私は造ったからには必ず責任をもつ。白髪になるまで責任を負う」

と、イザヤ書にあるでしょ。詩篇にも、

「自分が白髪になるまで、神を信ずる者が乞食になつているのを見たことがない」

と、ちゃんと書いてあります。だから、家族に責任があるからといって、ガツガツ働くのではない。

「神さまが私を用いて家族をも支えてくださる。それを信じて私は精一杯やります」

と。やはり、向こうに、神さま・キリストの側に抛り所を置く。でも、キリストは、

「私が責任をもつからお前は寝ていい」

とは全然仰らない。

「働け、身を粉にして働け」

と。そうでしょ。そこをしつかりわかつてほしいんです。

「信仰さえあれば、遊んで暮らしていい」

なんてどこにも書いてない。テサロニケ書に出きます、そういう連中が居ると。

「家から家へ訪問してはペチャクチャしゃべっていて何もしていないでいる。そんなのはいかん。やはり自分の食いぶちぐらい自分でしつかり稼^{かせ}げ」

と。しかも、テサロニケではそれは女性の姿で書いています。

要するに、信仰だといましてもいろんな誤解があるわけです。本当のオーソドックスなキリスト道、それを私たちは求めてきた。その先駆者が小池辰雄だった。いろんな苦勞をなさつて到達された道がキリスト道です。それが『無者キリスト』（小池辰雄著作集第1巻）という本に実を結んだでしょ。私はその小池辰雄から吸収できるものは全部吸収したい。そしてそれを世に伝えたい、後の世代に伝達したい、そういう使命感を持った。それで40歳になるときに一人立ちしたんです。それから45年経ちました。まっすぐに歩んできたと思っております。

だから、私は絶対、自己主張はしません。自分が立派だからこうなりましたとか、自分ほこれだけの努力をしたからこうなっていますとか、一切言わない。キリストが私をつかまえて、いろんなところをなさしめ給うた。ときには、自分で背負いきれない荷物を背負わされた。社会的なポストからしても非常に責任あるポストにつけられます。それと福音という道とはなかなかピタッと一つというわけにはいかないですよ、この



地上での仕事というのは。でも、どんなところにあっても、

「われ汝を離れず。汝を捨てて孤児としない。われ生くれば汝も生くべし」

と、ヨハネ伝にあります。キリストは、

「生きろ、生きろ。この世の命以上のものを私はお前に与えた。永遠の生命、

これで生きろ。所を備えたらまた帰ってくる。そして、お前たちと一緒にいるぞ」

と、ヨハネ伝14章から16章のところに繰り返して書いてある。キリストの遺言ですよ。誰でもこの地上を去って行くときは、自分の周りの者にこれだけは言っておきたいということがあるはずですね、遺言という形で。そのキリストの遺言がヨハネ伝の14章から16章に綿々と綴られている。ああいうものを本当に皆さん、じかじかにキリストが語りかけてくださっているということで、真剣に受けとってほしい。伝道者だけが受けとってほしいとか、特定の人だけが受けとっていいのではない。万人に、人が人であるかぎり、生命の言葉としてしっかり受けとって、それを生きていく、実践していく。それがあって初めて伝道ということが成り立っていくんです。

●苦難経たる生涯ゆえ栄光ゆたけき御座の許

私の今日の本論の題は、

「伝道（証し）・宣教の使命と実践」

と、こういうふうな銘打っております。これは特別集会の最後の集会ですよ。その最後に皆さんに受けとって欲しかったのがこれなんです。

「自分一人救われてよし。自分の家族が救われてよし。ああよかった、幸せです」

と、そんなんじゃないよと。

「一粒の麦、地に落ちて死なずば、ただ一粒にてあらん。死なば、多くの果を

結ぶべし」

と。だから、クリスチャンになるということは、犠牲になるということなんです。そんなのは嫌ですか。キリストは犠牲になってくださったでしょ。キリストは理由なく犠牲になってくださった。そして、我々に生命をくださった。キリストの弟子である、キリストによって生命をいただいた人間が、それ以下であつたら申し訳ないですよ。

パウロは本当にキリストの一番弟子として——あれは生きておられた時の弟子ではない——復活のキリストによって、キリスト教徒を迫害していたときにひっくり返された。

「我は罪びとの首」^{かしら}

と自分で言っている、そういうパウロです。それが本来の弟子以上の働きをしてくれた。本来のお弟子さんはみな漁師さんですから、いろんな霊の賜物をいただいたって、それを本当の意味で健全に世界に展開していくにはやはり限界がある。そこは、キリストはパウ



口を選ばれた。パウロあつての、我々はキリスト教をいただいている。これはもう定説になっていきます。他方ではいろいろパウロを批判する勢力もありますけれども、そんなことは私は関係ない。パウロをしてあのように叫ばしめ、たくさんの書簡を書かしめ、あちらこちらに教会をつくりだし、そしてパウロは口のことを一切考えていない。

パウロの苦難というのは全部、キリストから賜った苦難を耐え抜いて行つた。それがコリント書にズラズラと、どれだけの苦難があつたかということ、パウロは並べているでしょ。39の鞭を5回受けている。笞しもとでやられたのが3回——笞とは金属の破片が付いてますから、あれでやられると肉が抉えぐりとられるんです——そういうのが3回あつたとか。それから40に1足りない鞭——なんで39回かわからないですが——それが5度とか。それから一昼夜、海を漂つたことがあるとか。市中の難、同族の難、何とかの難とか、並べてます。しかも、キリストに生命を献けんげているパウロが、ああいう苦難を味わっているということは、深い御意があると私は思うんです。

「クリスチャンなら、めでたし、めでたし。すべてが幸せ」

なんて、どこにも約束されてない。それがさきほどの、

「苦難経くるしみへたる 生涯いのちゆえ

栄光さかえゆたけき 御座みざの許もと」

ということ。だから、地上でいわゆるこの世的な幸せを求める人は福音にはふさわしくありません、残念ながら。この世の宗教は全部、この世の幸せを約束します。でも、福音はちがう。新天地、神の国、そこに全部約束されている。この地上は、キリストと一緒に苦しみを通つて行く。

「栄光をいただくなら、苦しみも共にする」

とローマ書でも書かれています。だから、キリストと苦しみを共にしてそれを喜びとしないような人はクリスチャンとはいえない。御利益宗教ですよ、それは。

「いや、そんなんやつたら、やめますわ」

と仰る方はどうぞやめてください。もう仕方がない。私ではないんだもの。福音がそういうものなんですから。

「日々、己を捨て、おのが十字架を負いて我に従え。己を救わんと思う者はこれを失い、わがため、福音のため自分の生命を捨ててかかる者こそが神の国にふさわしい」

と、キリストはハッキリ言っておられるのだもの。ああいうものを伏せてしまつて、幸せばつかり約束するのはインチキですよ、そんなものは。そうじゃありませんか。人のご機嫌をとろうと思つたら、いいことばつかり言えがいいですよ。でも、そんなのはインチキです。私はもうそれを、誰に何と言われようと、ハッキリ告白していきます。でも、

「この地上の苦しみが多ければ多いほど、栄光もすごいよ」



という。この地上で幸せな人は、栄光も乏しいかもしれません。

そういうものなんですわ、この地上世界は、神さまの目から見て。つまり、ここが最終地点ではないから。ここは通過点なんだから、本ものの世界への。でも、世の人はここが最終地点だと思っている。

「せめて地上に居るあいだは幸せになりたい。若い時は苦勞した。せめて幸せな晩年を過ごしたい」

と、みなそう言う。ところが、なかなかそうはいかんですね。あれだけ面倒みた息子が背いたりとか、いろいろね。それでまたブツブツ、ブツブツ言う。親族、家族の問題でブツブツ言うだけでなく、自分の身体のここが痛くてあっちが痛くてと。それはそうですよ、だんだんボロボロになっていくんだもの。青春時代、青年時代がピークでしょ。放物線のように、20、30代でピークになって、30過ぎるとだんだん衰えていつて最後はドスンと落ちる。そうなつてくると、息子、娘も、「嫌な年寄り、嫌な介護」と言つて、また嫌がられる。なんと惨めな人生か。これが普通のこの世の人生です。だから、

「一番ピークで向こうへ往つた人は幸せだ」

ということになつてくる。そんなんでは、皆さん、我慢できないでしょ。さつきの歌に、

「苦難経たる 生涯ゆえ

栄光ゆたけき 御座の許」

とあるように、やがてみ栄光の素晴らしい天界が待っている。そして、上からの力が引き上げていく。地上へ引つ張る引力よりも、神さまの方から上へ引き上げる力の方が強い。それに身をあずける。すると、どん底まで落ちたと思つたら、だんだんスーツと上へあがつていく。天上無窮、神さまの次元まで引き上げていただく。これがクリスチャンですよ。クリスチャンで苦しみとか不幸とか何とか味わっていないのは、まだまだ神さまは甘やかしている。それで終わらないですよ、きつと。早死にしたならそれで幸せですけれども。ずっと百年まで生きてきたら、必ずいろんなことがご自身の上にも、親類縁者、家族たちの中にも何かいろいろあると思います。福音は、

「この世でいわゆるこの世的な幸せいっぱい過ごさせてやる」

なんて、どこにも約束されていない。

まあそういう、つまらんことばかりしゃべつてもしょうがないね、そのぐらいにしましょう。今日の本論にいかないと。つまらんことをしゃべるのが私の欠点でね、それは申し訳ないです。

●人の前でキリストを告白する

《人の前でキリストを告白（証し）することをためらつてはならない。（ルカ12・8〜9）》

ところが、これを嫌がる人があるんですね、クリスチャンの中に。これはダメですよ。キ



リストが仰ることは、有利であろうと不利であろうと、何であろうと、全部「はい」と言
つて受けとつていかなないとね。つまみ食いして、いいところ取りするということは、本当
の姿ではありません。いいことだけ言つてたら、人はついて来ますから、人を集めようと
思つたら、いいことばかりしゃべつていれればいい。でも、それは偽りですから。私は正
直に福音書に書かれていることをそのまま伝えたいします。
ルカ伝12章8節から9節。その前を少し見ておきましょう。

「¹その時、無数の人あつまりて、群衆ふみ合うばかりなり。イエスマズ弟子
たちに言い出で給う『なんじら、パリサイ人のパンだねに心せよ、これ偽善
なり。²蔽^{おほ}われたるものに露^{あつわ}れぬはなく、
パリサイの偽善は当然現れてしまう。隠しているわけですから。

隠れたるものに知られぬはなし。³この故に汝らが暗きにて言うことは、明
るきにて聞こえ、部屋の内にて耳によりて語りしことは、

「壁に耳あり」とかいふ。

屋の上にて宣^のべらるべし。

そのぐらいにすべては露頭していくものだということを抑つた。

⁴我が友たる汝らに告ぐ。身を殺して後に何を^なも為し得ぬ者どもを懼^{おそ}
るな。⁵懼るべきものを汝らに示さん。殺したる後ゲヘナに投げ入るる権威あ
る者を懼れよ。

ところが、クリスチャンには、身を殺してもらいたくないという、

「この身の安全を約束してくれなかったら、私はクリスチャンになりません」
というのが多いんですよ。でも、キリストはこうやつて、

「この地上に居るかぎり、いわゆるこの世的幸福は約束できない。そんなものにお
びえていたらダメだ。何がこようと突き抜けた、神の霊の次元、生命の次元、そ
こに突入しろ」

と言つておられる。でも、それでは人は付いて来ないんですわ。だから、いいことばつ
かり言つて人を集める、というキリスト教がこちらにあるかもしれない。私は逐一
調べてみせんけれども。でも、ここに書いてありますね、

身を殺して後に何を^なも為し得ぬ者どもを懼るな。⁵懼るべきものを汝らに示
さん。殺したる後ゲヘナに投げ入るる権威ある者を懼れよ。われ汝らに告ぐ、
げに之を懼れよ。⁶五羽の雀は二銭^{すずめ}にて売るにあらずや、然るに其の一羽だ
に神の前に忘れらるる事なし。⁷汝らの頭の髪^{かしら}までもみな数えらる。懼るな、
汝らは多くの雀よりも優^{すぐ}るるなり。⁸われ汝らに告ぐ、凡そ人の前に我を言
いあらわす者を、人の子もまた神の使^{つかい}たちの前にて言いあらわさん。⁹され
ど人の前にて我を否^{いな}む者は、神の使^{つかい}たちの前にて否まれん。



だから、ハッキリとキリストを告白することが大切です。

「今日ここでキリストを告白するのはちよつとまずい。自分の出世の妨げになる。だから、やめておきましょう」

とか、そういう配慮はダメだ。誰の前であろうと、有利であろうと不利であろうと、ハッキリと自分の身を証しなさいと。

昨日、言いましたね、私が最高裁判事に任命される時に、私はハッキリ告白して、

「これでお困りなら、私はお受けできません。ただし、宗教活動はいたしません。京都で祈りを共にしてきたお年寄りの方々との祈りは続けていきたい。伝道活動はしません。誤解を受けるから。それでよろしいか。それがダメなら、お受けできません」

と言った。そしたら、

「よろしい」

と答えてくれた。これが私にとっては、人の前にてキリストを告白する姿なんです。

「ちよつとこれは出世の妨げになる。せつかくいいポストが目の前に提供されているのに、ちよつとキリストを告白しないでござい」

そういう態度を私はとりたくない。それから、皆さんがキリストを告白した時にいろいろ迫害を受けるかもしれない。それはその当時の話ですけれども、その後だって、特に戦時中なんて大変だった。

いかに何を答え、または何を言わんと思ひ煩うな。¹²聖霊そのとき言うべきことを教え給わん』（ルカ12・1〜12）

と。

「汝ら、心を騒がすな。神を信じ、我を信ぜよ」

ヨハネ伝14章。あれですよ。いろんな窮地きゅうちに追いやられるかもしれない。キリストの弟子であるゆえに。けれども、

「汝ら、心を騒がすな。我、平安を汝らに残す。わが平安は世の与える平安とはちがう。汝らは世にありては患難あり。されど雄々しかれ。我既に世に勝てり」

と。あのヨハネ伝の14章から16章までのキリストの最後の遺言、そして17章の大祭司の祈り。ああいうものはしっかり身体の中にしみ込ませていたのだと思います。

それが今言いました、人の前でキリストを告白することをためらってはならないということですよ。

●キリストの福音を伝達する使命

その次に、



《我々は、同胞に、また、次世代を担う人たち（若者）にキリストを、その福音を、伝達する使命を帯びている。》

この自覚をしつかり持つていただきたい。

「自分一人救われて幸せでした。幸せな人生を全うできました」

そんなのは、私はちつとも素晴らしいとは思わない。キリストと苦しみと共にする。喜びも苦しみも悲しみもすべてを共にする。これが本当の兄弟愛ではないでしょうか。キリストは、私たちを「兄弟」と呼んでくださっている。そして、ここでは特に伝道ということからいいますと、パウロは異邦人に伝道しました。けれども、パウロの願いは——かつて自分はキリストに逆らっていましたから、今でもユダヤ人たちはキリストに逆らって悔い改めようとしません。それが心の痛みである——

「たとえば自分がキリストに呪われても、同胞が救われてほしいんだ」

ということをローマ書、ガラテヤ書でパウロは切々と告白しています。それをここに引きました。

《ローマ書10章でパウロは、同胞であるユダヤ民族の救いのための切実な思い・願いを吐露している。「わたしの心の願い、彼らのために神に捧げる祈りは、彼らが救われることである。わたしは、彼らが神に対して熱心であることは証しするが、その熱心は深い知識によるものではない。なぜなら、彼らは神の義を知らないで、自分の義を立てようと努め、神の義に従わなかったからである。キリストは、すべて信じる者に義を得させるために、律法の終りとなられたのである。」（1〜4節）

この箇所を日本社会に適用するならば、次のように言うことが出来るだろう。

これを私は日本社会に適用したら次のようになる——こんなことを言った人は多分いないと思いますよ、でも——私はこのように思いました。

「彼ら（日本人・日本民族）は、宗教に対して熱心であるが、

これはそうだと思う。聖徳太子以来ずっといろんな宗教、哲学が入ってきました。非常に真剣でした、みなそれに取っ組んで。特に鎌倉仏教なんていうのは、それこそ命懸けですもの。

宗教を超えた『真の実在者（真の神）』と『その心（本願）』を知らないで、それゆえに、己が宗教を立てようとし、それに執着している。「キリストは『宗教』の終りとなられたのである」と。

こういうふう読み替えたいんです、日本社会に適用して。

そして、パウロは、ほんとうの「救い」はキリストを信受することによって成就すると宣言し、キリストによる救いと、宣教の必要性を訴えている。

「聖書（旧約）は、『すべて彼（イエス）を信じる者は、失望に終ることがない』と言っている。ユダヤ人とギリシャ人との差別はない。同一の主が万民の主であって、



彼を呼び求めるすべての人を豊かに恵んで下さるからである。なぜなら、『主の御名を呼び求める者は、すべて救われる』とあるからである。（ロマ10・11～13）
ちよつと直接ローマ書の10章に当たってみたいと思います。

「兄弟よ、わが心のねがい、神に対する祈は、彼らの救われんことなり。
2 われ彼らが神のために熱心なることを証す、されど其の熱心は知識によらざるなり。3 それは神の義を知らず、己の義を立てんとして、神の義に服したがざればなり。4 キリストは凡て信ずる者の義とせられん為に律法おきての終となり給えり。

律法にピリオドをうたれた。

5 モーセは、律法による義をおこなう人は之によりて生しるくべしと録した
り。6 然れど信仰による義は斯ひまわくいう『なんじ心に「誰か天に昇らん」と言
うなかれ』と。7 これキリストを引下ひまわさんとするなり『また「たれか底なき
所に下らん」と言うなかれ』と。是キリストを死人の中より引上げんとする
なり。

私はこここのところがよくわからないんです、何を言っているのか。そこは飛ばさせてもら
つて、次の8節から、

8 さらば何と云うか『御言はなんじに近し、なんじの口にあり、汝の心にあり』
と。これ我々が宣のぶる信仰の言なり。

パウロはこれを言っているのだと。

「御言はなんじに近し、なんじの口にあり、汝の心にあり」

と。その「口にあり、心にあり」というのは、いつたいたいどういうことかというものが次にま
た出てきます。

9 即ち、なんじ口にてイエスを主と言いあらわし、心にて神の之を死人の中
より甦よえらせ給いしことを信ぜば、救わるべし。10 那人は心に信じて義と
せられ、口に言いあらわして救わるるなり。（ロマ10・1～10）

私は初め初期の頃はこここのところがよくわからなかった。

『口にてイエスを主と言いあらわし、心でキリストを神が復活させられたと、信
じるだけで救いがやつてくる』という、へエ、不思議なことだなあ」

と思った。でも、これは、心の中の見えないですよ。見えない心の中の変化、内
的な変化、それを口で告白する、生活で告白する。ハッキリと外部に表す。外部に表して
初めて内なるものがハッキリ出てくるんだと。キリストは、

「隠れたもので現れないものはない」

と仰うつたけれども、やはり、隠れつばなしではいかん。隠れクリスチャンではダメだと。
迫害を受けようが何しようが、ハッキリ告白しなさいと。それがルカ伝の、



「私を否む者を私も知らないと言うよ」

それにつながっていると思う。だから要するに、私たちはキリストをいただいた。内的な確信を持っているのは、それは素晴らしい。しかし、その内的確信にとどまらないで、

「ハッキリと外に告白しなさい。告白することで初めて内なるものは公おおやけに明かになっってくるんだ」

と。まあ変な比喻かもしれませんが、男女のあいだも、内縁関係というのは隠れた関係なんです、法律上は。戸籍に届け出て初めて公になる。ヨーロッパでは教会で結婚式を挙げて、そういうふうな形で公にする制度があるんでしょうけれども、日本ではそういうことがありません。

「結婚というのは男女の永遠の契ちぎりをやるんだから、外に出ようが出まいが、私たちがだけが本当に確信をもって生活したら、それでいいじゃないの」

と。これもひとつの考えです。けれども、社会生活においてはそれを公に表す制度が、婚姻届けを出すということ、それで公になる。これをやはりやってほしいというのが法律家の立場からはそうなってくるわけです。けれども、内面を重んずる人は、それは偽善だと言おう。

「内において確信してお互いが愛し合っていればそれでいい。届出ととけでして安心したいのは、それはいつか別れるようなことにならんように誓ちかいがほしいから、法律の届出制度にのっかって、いわばそれを守りの誓ちかにしたからやっているだけだ。純粹の愛は、そんなものはいらない。自分たちだけが愛し合っていれば、それだけで充分だ」

と。まあそんな議論があるかもしれませんが。皆さんはどうですか。皆さんのお子さん方、お孫さん方はどういうふうにお考えになっているか。はい一つの答えは、

「届けたってダメ。どうせ別れるんだからと。それから、

「三年間の契約結婚です」

「そんなものは公序良俗違反で裁判所は通用しません」

「だから、届出も始めからしません。愛し合っている間は一緒に生活する。愛が終わったら別れます。何がわるいんですか」

「まあ、お二人ならいいよ。でも、子どもさんのことを考えてごらん」

「いえ、子どもはつくりません」

「いや、それは子どもさんをつくらなくて、二人だけで仲良く晩年までおられたらいいけれども、ヨボヨボになったとき誰が面倒をみてくれるの？」

と私は言う（笑）。まあこの世のことはいろいろ考えたらきりが無い。法律家といたしましては。



でも、法律家としてこの世のことをいろいろ体験したり、相談を受けたり、実際に判例やなにかでやっている人間が、また聖書の方を一生懸命にやっている。これは二足草鞋わらじはええところですよ。でも、私はこれを不幸とは思っていない。法律だけで片づかない人は、福音の世界につれこんで、そこで本当の解決をする。法律関係でなくて、福音の方だけで救われる人はそれで充分。でも、両方持っている、これは使い方によっては非常に役にたつんです、人を助ける面で。そう思っているんですよ、私は。

京都召団は、私が法学部だったから、その系統の方々がいらつしゃいますけれども。ぜひ、賜りたるものは全部、神の栄光のために用いていただく。人を助けるために用いていただく。そういう奉仕の精神、犠牲の精神。キリストは弟子の足を洗われた。そのように自分も人の足を洗っていきたいと願います。

お医者さんは、お医者で素晴らしいですよ。医療、治療というものを通して、そこに神の愛を現していく。私は、お医者さんは、やはり祈りをもって治療なさるお医者さんが最高に素晴らしいと思う。単なる医学、医術ではない。

「癒し給うは神である。たとえ地上で癒えなくても、神さまの生命がこの人の中に流れますように」

と、そういう祈りで治療に当たられるお医者さんであってほしいと——私は法律家ですけれども——お医者さんに対する願いはそれです。

●地上と天上を結び合わせる仲人

ちよつと脱線しましたが、ローマ書10章に戻ります。

「⁹即ち、なんじ口にてイエスを主と言ひあらわし、心にて神の之を死人の中より甦えらせ給ひしことを信ぜば、救わるべし。¹⁰それ人は心に信じて義とせられ、口に言ひあらわして救わるるなり。¹¹聖書にいう『すべて彼を信ずる者は辱しめられじ』と。¹²ユダヤ人とギリシヤ人との区別わかちなし、同一の主は万民の主にましまして、凡て呼び求むる者に対して豊かなり。¹³『すべて

主の御名を呼び求むる者は救わるべし』とあればなり。

これはヨエル書からの引用ですね。確かに、

「主の御名を呼び求むる者は救わるべし」

と、これは素晴らしい。しかし、聴いたことのない人、全然知らない人に、「御名を呼び求めろ」と言われたって無理ではないですか。まずご紹介していただかないと。このお方がどんなお方で、どういうことをなさったかと、ちゃんとやはり言っていただかないと困るではないですか。まあその通りだと。信じないものを、「呼び求めろ」なんて言われても無理ではないか。また、聴いたこともない人に、「信じろ」なんて言われたって無理ではないか。やはり、聴くためには伝えてくれる人が要る。



14 然れど未だ信ぜぬ者を争で呼び求むることをせん、未だ聴かぬ者を争で信ずることをせん、のべつた宣伝うる者なくば争で聴くことをせん。

しかし「伝える」と言ったつて自分で立候補したつてダメなんです。神さまに選ばれて、「お前は福音を伝えろ」

と。こういう迫りをいただいて初めて、「伝える」ということが果を結ぶんだと。神に選ばれ、伝達者、メッセジャーとなつて遣わされる。選ばれて初めて役割を果たせる。

15 つかわ遣されずば争で宣伝うることをせん『ああ美しきかな、善き事を告ぐる者の足よ』と録されたる如し。（ロマ10・9～15）

ここから先は、ユダヤ人はちつとも悔い改めてくれなかつたというパウロの嘆きですので、ここは省略します。

私たちは、自分たちはキリストの素晴らしい救いをいただいた。のみならず、キリストご自身が何と素晴らしいお方かということ、我々は身体にしみ込んで、いただいた。したら、このお方を伝えないではいられない。「ねばならない」ではない。そうせずにはいられない。これなんです。私は「ねばならない」人間だつたんですね。「ねばならないからやります」という。これはしんどいんですよ、義務であるから。

皆さん一人びとりがそうなんです。「あの人か？」と言われるくらいに変貌してください。「お前が？」

「そうだよ。あんたからお前が？」と驚かれるようなことをキリストはされるんだ。ところで、聞きたいけれども、あんたは大丈夫？ あんたはもうすぐ向こうへ往く予定やと思うけれども、ちゃんと予約してありますか？ 往つた時にさ迷つて亡霊になつて現れたら、いややからね。だから、ちゃんと予約しておきなさいよ」と、逆に質問してやる。

「では、どうやったら、予約できるの？」

「私にまかせない。私は予約するためにつかわされて来ているんだから。仲人だ。なこうど地上と天上を結び合わせる仲人だよ」

「キリストが中保者だ」なかだち

と書いてあるでしょ。キリストは人と神の間の「中保者」なかだちになった。しかも、なかだちは自分で十字架で身の代金を全部払つたんですよ。本来、地獄へ往くのが当然だつた人間を、金を払つて地獄から買いもどした。

これは遊廓がそうだった。昔、貧しい人が娘を売り飛ばす。そして、金をもらうわけです。今度は、その娘を連れ戻そうと思つたら、金を出さんとそれはできない。ヤクザの世界でもやはり掟おきてがありますから、掟を破つたらダメです。そこへ現れたのがその女性を愛してやまない男性。そして身の代金を払つて取り戻す。旧約聖書のホセアの世界はそんな世界で



すよ。やはりヤクザの世界でも何でも全部、掟、法則がある。法則に反することは許されない。だから、ヤクザの世界へ乗り込もうとしたら、ヤクザの論理にのつかって、それだけのことをして、ちゃんと贖い金を払って、それで取り戻す。キリストは別に、神さまの世界はヤクザではありませんけれども、

「我々の罪の支払う報酬は死である」
と、ハッキリ書いてあるでしょ。私たちは死ぬべき罪びとなんです。

「我は死ぬべき罪びとなり」
と、讚美歌136番にある。これを私は、皆さんにゆめ忘れてほしくない。詩篇23篇も素晴らしいけれども、この136番は涙なくて歌えない。これは大事な讚美歌です。

「血しおしたたる 主のみかしら、

とげにきされし 主のみかしら、

なやみとはじに やつれし主を、

われはかしこみ きみとおおぐ。」

「主のくるしみは わがためなり、

われは死ぬべき つみびとなり、

かかるわが身に かわりましし

主のみこころは いとかしこし。」

「なつかしき主よ、 はかり知れぬ

十字架の愛に いかに応えん。

この身と魂たまを とこしえまで

わが主のものと なさせたまえ。」

「主よ、主のもとに かえる日まで、

十字架のかげに 立たせたまえ。

み顔をあおぎ み手によらば、

いまわのいきも 安けくあらん。」

これが我々の生き方だと思えます。それともうひとつ、これと並んで大事なのが285番です。136番は根底的な贖いの讚美歌だとしますと、285番はそれをベースにして主に献げていくクリスチャンの生き方。これを示しているのが285番だと私は受けとっています。

「主よ、み手もて ひかせたまえ、

ただわが主の 道をあゆまん。

有利であろうと不利であろうと、そんなことではない。

いかに暗く けわしくとも、

みむねならば われいとわじ。」

「ちからたのみ 知恵にまかせ、



われと道を えらびとらじ。
自分勝手に自分の道を選ぶ、それはしたくないと。

ゆくてはただ 主のまにまに
ゆだねまつり 正しくゆかん。」

主にゆだねていくことが正しく行く道なんです。自分で正しいと思って行くのではない。主が導き給うままに身をゆだねていくのが正しい道だと。

「主よ、飲むべき わがさかずき、
えらびとりて さずけたまえ。

よろこびをも かなしみをも、
みたしたもう ままにぞ受けん。」

「この世を主に ささげまつり、
かみのくにと なすためには、

せめもはじめ 死もほろびも、
何かはあらん、 主にまかせて。」

それからついでながら、世の人々に向かつては、517番です。

「われに来よ」と主は今、 優しく呼びたもう。
などで愛のひかりを 避けてさまよう。」

「かえれや、わが家^や 帰れれや」と主は今呼びたもう。
「つかれはてしたびびと、 重荷をおろして、

きたりいこえ、わが主の 愛のみもとに。」
「まよう子らのかえるを 主はいま待ちたもう、

つみもとがあるまま きたりひれふせ。」

●パウロのアナテマ魂

私は京都キリスト召団を、「鴨川温泉キリストの湯」と呼んでいる。キリストの湯につかっていますとね、

「ああ、主さまの中におる」という実感がわくんですよ。しかも、身は裸でしょ。裸のつきあいをしているわけですよ。主さまと。

まあ讚美歌であろうと、お風呂であろうと何であろうと全部、私の思いはキリスト直結ですわ。どこにいてもキリスト直結。太陽の光をあびれば、主さまを思う。もうそれしかない。なんせ、一人住まいの哀れなお年寄りと世間では見るはずが、どっこい、そういう元気なやつかいなお年寄り、口を開けば、「キリスト、キリスト」と言っている。

私の所にはちゃんと「財団法人京都キリスト召団」という看板を出しているでしょ。近



所の地図にも全部出てくる。大事なんです、

「我ここにあり」

ということをはッキリ示すことは。これは大事です。なにも屋根に幟のぼりを立てるとか、そんなことは言いません。でも、「我ここにあり」ということを、出入りする新聞屋さん、郵便屋さん、その他いろいろな人が出入りします。みんなわかるわけです。日曜日ともなると、ゾロゾロあの細い路地を通って集会所に入って行かれる。近所の人はみんな知っています。それが私はいちばん近所の人を知っていてほしい。くに荘で講演会をやったら、近所の方が二人か三人来てくれました。そういうことがうれしい。地域と離れて孤立して存在したくないんです、私は。やはりイエスはナザレのイエスで、故里を大事にされたと思う。まあそんなことで、私たちはこの地上を歩みながら——地上とは生きる次元においては一線を画していますけれども——地上に溶け込んで、みんなの中に溶け込んで、パウロが

「あらゆる人の姿になった」

と言うでしょ。

「悲しんでいる人には悲しんでいる人の姿になり、福音のためにはどんなことでもする」

とコリント書で言っている。それだけの面構え、気構えを、

「責めも恥じも厭いといません」

ということを実際の生活で表していく、そういう捨て身の姿勢、これがクリスチャンに求められています。それが証しということなんです。そういうことを、どうぞ、皆さん、

「キリストのためなら命を惜しみません」

と。口先じゃない。実際の生活そのものが献げ切った生活をしていく。「教会制度がどうである」とか、そんな組織のレベルの問題ではない。生命、キリストの生命、これをいただいた人間。「羔の血を身に浴びて」という、あの讚美歌のように、我々自身が生けるキリスト者となって、キリストがわがうちに燃えて呻うないておられる。

「この呻うなきの愛を受けとってほしい」

と、パウロが、自分たちの同胞がキリストを受け容れないで、今も異端であるクリスチャンを迫害する、そういう同胞を何とか救ってほしいと。

「同胞が救われるためには、私自身が呪われて地獄へ落とされても構わない」

と、ガラテヤ書で言っている。「アナテマ魂」という。「アナテマ」「呪われ」という。そういう熱烈な同胞愛を持っているパウロ、それが使命は異邦人伝道だった。それで同胞の救いはペテロとか、もともとのお弟子さんたちが担っていた。エルサレム本山はペテロ、ヤコブ、ヨハネ、そういう人たちが守る。それに対してパウロは小アジア半島の異邦人伝道、それが神さまのご計画だったんでしょね。



そのパウロの流れを私どもが引き継いでいると思ってるんです。「何派、何派」なんていうのではない。福音、キリスト道。キリスト道は十字架道です。

「十字架の言は、これを無視する者には愚かである。滅びる者には愚かである。けれども、信ずる者には神の力なり」

と。ああいう短い言葉ですけども、パウロの信仰の核心的なものをしっかりと、皆さん、身に体してください。人に福音を語る時に、

「聖書が手元ないと語れません。ちよつと待って、準備しますから」

とか、そんなんじゃないんです。即座にパツパツパツと、何でも流れ出るようになってくるくらいに皆さん自身が福音体になってほしい。

「私を見たものは、私の背後にあるキリストさまをあなたは見ていらつしやるんですよ。私は何ものでもない。私は偉くもなんでもありません。でも、キリストが私を突き動かして、口を開けばキリスト。そういうことになってしもうたんですわ、すんませんな、えらいこと。日本の社会で、キリストさま、キリストさまと言うて、えらい申し訳ないんですけれども、しょうがないんですわ」

と。そんなふうには、関西弁なら関西弁で、江戸っ子は江戸っ子らしく、人の前でキリストを告白する。どこでも何でもいい。ええかつこうせんでいいですよ。地金でいいですよ。

「私はこれ以外の何ものでもないんだから。いやなら、ご縁がなかつたんですわ」

と。繕うのは偽善という。それぞれの所に良いもの悪いものいろいろあるでしょう。その中でやはり素直で正直がいい。それぞれローカルカラーがあります。それも弁えておかないと。私が住んでいた、春日学区^{かすが}という所は、

「頼山陽の住まいし所、新島襄先生が住まいし所」

と校歌に出てくる。新島襄がやはり受け容れられているんですよ。仏教のメッカにキリスト教を持ち込んだのですから、これはもう大変なことですよ。頼山陽は皇室を尊んだ。幕府とかその他のいろんな勢力がある中でやはり日本は皇室を中心にしていくべきだ、ということを説いたらしい。頼山陽と新島襄、これがあの地域のいわば誇りなんです。でも、やがて奥田昌道が出てほしい（笑）。キリストを証した人。そう願っているんです。今から百年後か二百年後かわかりませんよ。まあまあ、そんなくだらんことを思ったり、一人暮らしのお年寄りでございしますので。私は漫談のようなことを言ってきましたけれども。

●キリストの命懸けの愛に生命をもつて応える

このプリントの最後に、

《我々、キリストに救われた者は、「救われたこと」で佳しとせず、進んで「救われたこと」を人々に伝達し（告白し）、福音を身証する責任を担っている。そのためには、「恥をかく」ことを恐れてはならない。》



パウロの告白：「わたしは福音を恥としない。それは、ユダヤ人をはじめ、ギリシヤ人にも、すべて信じる者に、救いを得させる神の力である。神の義は、その福音の中に啓示され、信仰に始まり信仰に至らせる。これは、『信仰による義人は生きる』と書いてあるとおりである。」（ローマ書1・16～17）

それから今度はコリント書。

また、パウロは、「福音を宣べ伝えないではおれない。福音のためなら、どんなことも厭わぬ」と心情を吐露している（コリント第一9・16～23）。

このコリント前書の9章の16節から23節、これはさつき申し上げたかしたことでしたので、ちよつと見てください。

「16 われ福音を宣伝うとも誇るべき所なし、己むを得ざるなり。もし福音を宣伝えずば、我は禍害なるかな。若しわれ心より之をなさば報を得ん、たとい心ならずとも我はその務を委ねられたり。

キリストからゆだねていただいた。

18 然らば我が報は何ぞ、

ただで代価なしに福音を伝える、これだと。本来、二倍の報酬をいただく資格があるというんです、当時から。あのユダヤの制度は、レビ族というのは働かないでしよ、神に仕えるのがお仕事です。だから、他の部族が全部、十分の一を献げたわけです。そこから「十分の一献金」というのが始まったと私は理解している。ところが、パウロは「それをいただかない」というんです。福音を宣べ伝えるのに人にお金を出させない。

福音を宣伝うるに、人をして費なく福音を得しめ、而も福音によりて我が有てる権を用い尽さぬこと是なり。

正当な報酬を受ける権利を用いない。これが私の誇りだと。そして、そこから先です。

19 われ凡ての人に対して自主の者なれど、誰にも隷属しない。ところが、すべての人の奴隷になると。

更に多くの人を得んために、自ら凡ての人の奴隷となれり。

これはルターの『キリスト者の自由』というところに引かれていた。

20 我ユダヤ人にはユダヤ人の如くなれり、これユダヤ人を得んが為なり。

キリストのところを持つてきたい。「水は方円にしたがいて」というように、彼らの慣習とか風習をパウロはもちろんよく知っていますから、それに自分を溶け込ませていった。それは彼らを救いあげたいからだ。自分は律法の外に居るけれども、律法の下にある者のような姿になったと。

律法の下にある者には——律法の下に我はあらねど——律法の下にある者の

如くなれり。これ律法の下にある者を得んが為なり。21 律法なき者には——

われ神に向いて律法なきにあらず、反つてキリストの律法の下にあれど——



律法なき者の如くなれり、これ律法なき者を得んがためなり。22 弱き者には弱き者となれり、これ弱き者を得んためなり。我すべての人には

この「すべての人」は、「エブリボディ」です、ね、「オール」ではない。一人ひとりみなちがう。その一人ひとりの姿に自分はやはりなつていったと。

凡ての人の状さまに従えり、これ如何にもして幾許いくばくかの人を救わんためなり。23
われ福音のために凡ての事をなす、

恥じも外聞もない。土下座でもするよ、福音のためならばと。そこまでのパウロですね。

これ我も共に福音あずかに与らん為なり。

そして今度は、オリンピック競技のことを言い出した。栄冠を得るのはたった一人だ。自分もその一人になりたいと。

24 なんじら知らぬか、馳場はせばを走る者はみな走れども、褒美を得る者の、ただ一人なるを。汝らも得んために斯く走れ。

栄冠を得ようと思つたら、自分を慎まなければいけない。自堕落な生活、飲んだくれではダメだと。やはり自分自身を鍛え上げて、それにふさわしいプレイヤーに、走り競技者にならないとダメだと言っている。

25 すべて勝を争う者は何事をも節せつし慎む、彼らは朽つる冠冕かんむりを得んが為なれど、我々は朽ちぬ冠、天において輝く冠を得るためにやっている。

でも、我々は朽ちぬ冠、天において輝く冠を得るためにやっている。

26 斯く我が走るは目標めあてなきが如きにあらず、ボクシングをやるにしても、見当違いのことをやっていない。ちゃんと的まとをしつかり見つけて、それに命中させるような形でボクシングをやっているということを言っている。

我が拳闘するは空を撃つが如きにあらず。27 わが体を打ち擲たたきて之を服従せしむ。

それは自分が自堕落で福音から外れて、他の人は栄光にあずかるのに、自分だけが除け者にされて指をくわえて眺める、そんなことにならないように気をつけている。

恐らくは他人に宣伝して自ら棄てらるる事あらん。（コリント前9・16、27）
これは非常に伝道者としては大事なことだと思ひます。伝道者は、

「俺は大丈夫だ」

なんてつい慢心するかもしれない。でもどっこい、

「あんた自身がいちばん危ないよ」

と言われるかもしれない。そういう自覚をここで言ってくれていると思う。

とにかく、パウロという方は非常にすべてにおいて謙虚であり、健全で、そして人のために己を犠牲にしてやまない。これは、

「キリストの愛、われに迫れり」



と。キリストを迫害していた、死罪に当たる、罪びとの首であるこの自分をキリストは捕まえて、そしてキリストの僕にして、キリストの生命を分かち与える、こんな聖なる使命を下された。

「私は命懸けでやりたい。キリストの命懸けの愛に生命をもつて応えたい」
と。このパウロの気魄。これを私たちはいただいでいきたいと思えます。

●それぞれがそれぞれらしく神の愛を現す

今度はコリント後書の5章14節です。これも大事なところです。このパウロの叫びに共感し、実践していただきたい。

《コリント後書5章14節以下においても、パウロは、以下のように熱く語る。

「キリストの愛、われらに迫れり」、「一人すべての人に代りて死にたれば、凡ての人すでに死にたるなり。その凡ての人に代りて死に給いしは、生ける人の最早、己の為に生きず、己に代り死にて甦えり給いし者のために生きん為なり。」

だから、もう今からは肉によって人を知る、そんなことはしない。かつては、キリストのことも肉によって知っていたけれども、今はもうそんな知り方はしない。

「人もしキリストに在らば、新たに造られたる者なり。古きは既に過ぎ去り、視よ、新しくなりたり。これらの事はみな神より出づ、神はキリストによりて我らを己と和がしめ、かつ和がしむる職を我らに授け給えり。即ち、神はキリストに在りて世を己と和がしめ、その罪を之に負わせず、かつ和がしむる言を我らに委ね給えり。」

だから、我々はキリストの使い、メッセンジャーだと。

されば、我等はキリストの使者たり。恰も神の我等によりて汝らを勧め給うがごとし。

パウロは神さまから和解の伝達者として選ばれた。今度はあなたの方が伝道者となって、私を通して選ばれた。だから、その務めをしつかりやつてほしいと。

我等キリストに代りて願う、なんじら神と和げ。神は罪を知り給わざりし者を我らの代りに罪となし給えり、これ、我らが彼に在りて神の義となるを得んためなり。」（コリント後5・14〜21）

キリストは、

「我は道なり、真理なり、生命なり。我は門なり」

と。そういうことです。それから今度は、コロサイ信徒に対してのパウロの祈りです。

《コロサイ書においては、パウロとテモテからコロサイの信徒たちに対して、次のように勧め、また、願っている。

「目をさまして、感謝のうちに祈り、ひたすら祈り続けなさい。同時に、私た



ちのためにも、神が御言のために門を開いて下さって、私たちがキリストの奥義を語れるように、また、わたしが語るべきことを、はっきりと語れるように、祈ってほしい。今の時を生かして用い、外の人に対して賢く行動しなさい。いつも、塩で味つけられた、やさしい言葉を使いなさい。そうすれば、ひとりびとりに対してどう答えるべきか、わかるであろう。」（コロサイ4・2〜6）

それから、テモテに対して宛てた手紙です。

また、弟子のテモテに宛てた手紙において、パウロは、

「神は凡ての人の救われて、真理を悟るに至らんことを欲し給う。それ神は唯一なり、また神と人との間の中保も唯一にして、人なるキリスト・イエスはなり。彼は己を与えて凡ての人の贖価となり給えり、時至りて証せらる。」

と述べている（テモテ前書2・4〜6）。また、

「汝、御言を宣べ伝えよ、機を得るも機を得ざるも常に励め」と奨めている。（テ

モテ後4・2）

これが大事なんです。

「チャンスがきたら、やります」

ではない。

「常に励め、常に用意しておれ」

と。私たちも、

「いや、手元に聖書がないから、ちよつと今はできません」

とかではなくて、あなた方ご自身が聖書であると、そういうくらいになって、どんな人にもどんな時に出会おうと、すぐ直ちにお腹の中から活ける水が泉、川となって流れ出るような、そういう存在者になってほしいんです。我々は牧師を養成したりもしません。いろいろな組織も持ってません。一人ひとりが伝道者であり、一人ひとりが証人である。それぞれの器に応じて、神さまは、キリストは用いてくださる。

百花繚乱といいますね。ここにもいろんな花があります。大きな花、小さな花、人目につかない花、いろんな花があります。それぞれが置かれた場所で自分の役割を果たして神の栄光を讃えている、これが最高に素晴らしいんです。

「私はあれでないといやだ、私はあになりたい」

と、みんな人間は人を羨ましがって、自分がそれでないからひがんだり、いろんなことがあります。これは肉のわざですね。御霊の実はそのなものじゃない。よくパウロは、

「御霊の実はこれこれ、肉の思いはこれこれ」

と、ちゃんとコントラストで書いてます。ああいうものを無視しないで、それを大事にして、本当に福音という土台を持ちながら、社会生活において健全な在り方を示していく。



この世の中には、指針になるものがないんです、今は、何もない。これに沿っていけば大丈夫だという、そのプリンシプルがないんですよ、この今の世の中は。我々は、キリストなんですよ、キリスト道なんです。キリスト道がこの聖書に溢れている。我々自身がその御言となる、手紙となる、キリストの香りとなる。それが証あかしということなんです。人間を離れて証はない。雷が落ちて木が燃え上がったって、なにも人は驚かない。「ああ、自然現象だ」と、それで終わりです。でも、あなた方一人ひとりが神の言、真言しんごん——真の言まこと——そういう存在で、それぞれがそれぞれらしく神の愛を現す、神の栄光を現す、そういう在り方。これを最後にお願ひしておきます。では、これで終わります。

● 祈り

ひとことお祈りします。

主さま、この二日間をあなたがすべて備えてくださって、兄弟姉妹たちのご協力によって、金曜から今に至るまで二泊三日のこの特別集会を天国の場としてくださったことを感謝いたします。そのために愛労してくれた兄弟姉妹方を本当に感謝いたします。どうぞ、あなたが直接にその方々の愛労にお報いくださるよう、またこの二泊三日の短い集会でしたけれども、ここにおいて天の次元を味わうことができただけの方々がこのいたたい恵みを、どうぞ、これからの一年——また来年ここでお会いできることを願ひますが——その一年において本当に豊かな実を結ぶように、あなたご自身が躍動してくださるよう願ひいたします。来年ここでお会いすることができたならば、

「この一年間でこれだけの実を結びました」

と、それぞれが収穫を携えてここに集つてくれるように、心からお願ひいたします。

来たくて来れなかった方々、病をかかえている方々、いろんな事情をかかえている方々、あなたご自身がそれらの方々のところに馳せ参じてくださって、

「大丈夫だ、みんな祈っているからね。大丈夫だよ」

と、どうぞ、励ましてくださいますようお願いいたします。

この短い讚美、感謝、祈りを兄弟姉妹の祈りと共に、主イエス・キリストさまの聖名をとおして御前にお捧げいたします。アーメン。

